日吉図書館１階レファレンスコーナーの改装

－空間デザインが図書館の利用に影響を与えた一例－

長野（ながの）　裕恵（ひろえ）
（日吉メディアセンター）

1　はじめに

慶應義塾大学日吉メディアセンター（日吉図書館）（以下「当館」とする）では，2018年夏に１階レファレンスコーナーの改装を行った。そのきっかけは，2016年に山中資料センター２号棟（以下「山中２号棟」とする）が完成したことにある。日吉保存書庫に配架されていた旧三田メディアセンター所蔵資料の大部分が山中２号棟へ移動することになり，日吉保存書庫と当館地下書庫の資料再配置を行った結果，地下書庫に空きができることになった。この空きスペースに，利用が低下している古いレファレンス資料を移動することで，１階を主としたフロア再編に具体的に着手できる状況になった。2017年春にはフロアリニューアルを検討するワーキンググループ（以下「WG」とする）を組織し，１階をどのようなエリアとして設定するかを話し合った上で，その中心となる約400平米のレファレンスコーナー（図１）の改装に向けた議論を開始した。

図１　改装前のレファレンスコーナー

2　改装案策定まで

2008年[1]と2017年[2]に実施したLibQUAL+®のアンケートや，2015年２月の改装に先駆けて行ったボードアンケートの結果[3]によると，利用者は静かに学習する場所を求めている。しかし現状に対しては座席が足りない，うるさい，施設が古臭いなどの否定的な意見が寄せられ，その要求を満たしてはいなかった。

そのため，WGでは改装の目的として喧噪対策と座席増設を掲げ，段階的に１階の再配置を行った。まず，私語が目立っていた１階窓側のエリアに，レファレンスデスク前にあったセミナーコーナーを移動した。セミナーコーナー跡地には，レファレンスコーナー内の低書架を移設し，辞書や教科書を配置した。理由は２つある。１つ目は，教科書や辞書はよく利用されるにも関わらず，奥にあるレファレンスコーナー内では目につかずに問い合わせが多かったこと，２つ目は，入口を入ったときに書架がすぐ目に飛び込めば図書館に入ってきたことを意識させ，多少なりとも静かになればと考えたことである。

さらに，2005年以前に刊行されたレファレンス資料の大部分を地下書庫へ移動することで，レファレンスコーナーの資料を壁面の作り付け書架のみに集約した。中央にあった書架は撤去して，今回の改装の目玉となる空間を確保した。

WGでは当初，職員がレファレンスコーナーのレイアウトを考え，必要な什器を購入するつもりでいた。そのためWGメンバーで国際基督教大学図書館，神田外語大学附属図書館，立教大学図書館など評判の良い他大学図書館を見学し，参考になりそうな什器やデザインなどのイメージを共有した。

しかし議論が進んでも，イメージはあるものの，なかなかこれといった案が出てこなかった。什器レイアウトを工夫して喧噪を引き起こさないようにする一方で，古臭さを解消し，学生が好むカフェのような雰囲気を取り入れたいとも考えていた。また目に入りやすい１階で，広さもあるため，入学希望者が見学する際の目玉となるような質の高い空間にしたいという思いがあった。さらに当館の設計者である槇文彦氏のデザインイメージを壊さないことも念

頭に置かなければならない。このように相反する複雑な要求を満たすためには，専門家に相談したほうが良いと考え，空間デザインを専門とする本学理工学部の岸本達也教授と，その研究室に所属する学生にアドバイスを依頼した。学生からは，壁面の書架や机の木目調デザインを活かし，座席数を増やすと同時にゆとりを持たせる案が出され，これを要求仕様に加えていった。ある程度議論がまとまったところで，教授から卒業生のインテリアデザイナーを紹介してもらい，我々の無理な要求を，プロの技で見事なデザインに落とし込んでいただいた。

出来上がったデザイン案をもとに見積もりを作成し，教育環境改善を目的とする比較的高額な事業が認められる可能性のある「教育・研究調整予算（日吉）」に申請した。また閲覧席に電源コンセントを設置するために，書架撤去と同時に床のフリーアクセス化工事も行うこととし，2018年度の予算に組み込んだ。

高価な什器を購入することには反発もあったが，学生が利用したくなるような質の高い空間にしたいという思いに理解を得て，日吉キャンパス事務センターの用度・施設担当には予算面や工事スケジュール調整などで協力してもらうことができた。

3　改装の工夫点

以下，改装にあたり工夫した点を詳しく紹介する。

(1) 既存什器の活用

予算の限りもあり，現在利用している什器の一部については引き続き利用することを考えていた。6人掛けの大型の机は開館当時から使われているもので，デザイナーの希望もあって継続使用が決定した。この机は広さがあるため，多人数で集って会話が始まるなどの問題があることを伝えたところ，お互いが見えないように中央に植栽を配置する提案があった（図２）。

図２　目隠しのプランター

また既存什器の側面に電源コンセントを埋め込み，見た目もすっきりする工作をしてもらった（図３）。机や床に電源コードが這うことなく，非常に美しい造作となっている。

図３　電源コンセント

(2) 目線の方向による工夫

部屋に複数ある柱を二重に囲むように配置された机のうち外側の机は，利用者同士の目線が交わらないようにあえて高さを変えている。デザイナーからは，こうすることで内側の机も抵抗なく使われるとの狙いを説明されたが，我々は内心，アクセスしやすい外側の机が埋まると，内側には入りにくいのではないかと懸念していた。しかし，それは杞憂に終わった。外側の３席の中央はもちろん，内側の机も１人または２人連れの学生が好んで使い，無駄なく利用されるようになった。バーカウンターのような机と低い机がＬ字型に組み合わされ，見た目も面白い（図４）。

図４　段違いの机

(3) 窓際の壁面を利用した長い机

レファレンスコーナーの南側には銀杏並木に面した窓があり，四季を通じて利用者の目を楽しませてくれると同時に，採光にも役立っている。この意匠を活かし，窓側の長い壁面に等間隔に椅子を配置した机の設置を希望した。結果，盤面にハニカム構造

を採用した特殊な机をカスタマイズし，継ぎ目のほとんどわからない長さ28メートルの机が実現した（図５）。明るい窓から銀杏並木が見える白い机は非常に人気で，毎日ほぼすべての椅子が埋まっている。机の窓側に目立たない立ち上がりを造り，そこにケーブルを配線して一人２つの電源コンセントが使えるようにした。この立ち上がりは，ペンや消しゴムなどの小さい文房具が隙間に落ちることを防ぐとともに，もともと窓に設置されているブラインドの受け皿にもなるように工夫がされている。

図５　窓際の長い机

(4) 照明を生かす工夫

図面上では，什器は壁や書架の端に合わせて配置されていた。しかし，実際に配置する際には微調整が行われた。例えば，天井の照明と机が並行している箇所では，人が座るときに照明が人の頭と干渉し，影を作ることのないように工夫がされている（図６）。細かい点ではあるが，この工夫によって白い机が蛍光灯の光を柔らかく反射し，全体的に明るい雰囲気になったと感じる。

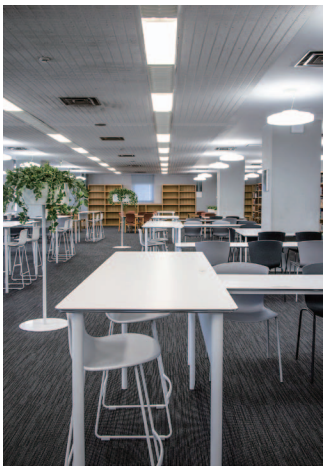

図６　机と照明

(5) 椅子の選定

このエリアは１階にあるため，長時間座ってじっくり勉強する場所ではなく，１コマの空き時間などに短時間利用することが想定された。そのためデザイン性や価格の観点からポリエチレン製の椅子を採用した。高さの調節ができないため選定は慎重に行い，納入業者のショールームで実際に職員がいくつかに座って選ぶことにした。また，中央にアクセントとして置くことになっていたソファは，学生が寝そべってしまう長いものではなく，１人で座れるものを選択した（図７）。このソファは片側の袖の幅が広く，タブレットやスマートフォンを見ながら利用できるようなつくりとなっており，実際に想定どおりの利用がされている。

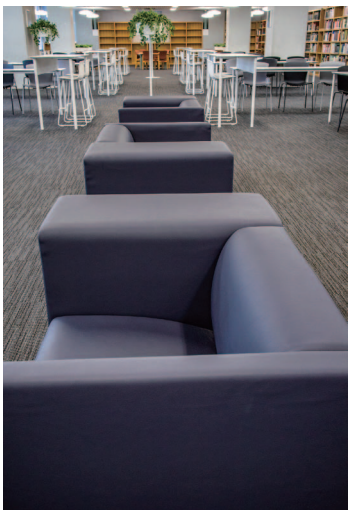

図７　片側の袖が広い１人掛けソファ

4　まとめ

当館にとって図書館とはあまり関わりのないインテリアデザイナーにデザインを依頼することも，また高価なインテリア什器を購入することも冒険ではあった。仕上がったレファレンスコーナーは，今までの図書館のイメージとは違う印象を与え，カフェと図書館が融合したような空間となったと感じているが，学生にとってはどうだろうか。９月の学期開始を緊張のうちに迎えたが，幸いなことに，レファレンスコーナーは１年経った今も当館の中でもっとも利用の多い人気の場所となっている。

休校期間中でさえ人の絶えないレファレンスコーナーは，利用者が増えたにも関わらず静かになった。稀に「おしゃべりしている人を注意してください」

と言われることはあるが，行ってみるとどこで話しているのかわからないほど小声で話している。拡声器で「静かに！」と注意していた頃と比べると，注意するのを躊躇うほどだ。当館を利用する教員にも「静かになりましたね」と言われて安心した。素人なりに分析をすると，インテリアの配置によって全体が見渡せるようになったことで，お互いの目が気になり，静寂を破るような行動がしにくくなった可能性はある。

レファレンスコーナーへの人の出入りが多くなったこと，そこに置かれるレファレンス資料の数が減り，壁一面に配架されて見やすくなったことなどによる副次的な効果として，レファレンス資料が以前よりも利用されているようにも見受けられる。空間の工夫によって様々な効果が得られることを学んだ改装となった。

今回の一連の改装で，喧噪問題はかなり解消したと考えているが，全体の座席数が大幅に増えたわけではない。座席不足解消については，他のフロアにも及ぶさらなる検討が必要となる。今後も多くの学生に使ってもらえる図書館にするために，限られた空間に何をどのようにレイアウトするのか，常に考えていく必要があるだろう。

最後に，本改装にあたり理工学部の岸本教授，デザイナーの高橋勇人氏，株式会社インテリアズの平山貴之氏には大変お世話になった。この場を借りてお礼を申し上げたい。

注・参考文献

1）長島敏樹．日吉図書館の施設・サービス改善．MediaNet．2009，no.16，p.24-27.

2）岡田将彦ほか．慶應義塾大学におけるLibQUAL+® 2017の結果と対応．MediaNet．2018，no.25，p.24-30.

3）佐藤佐和子．日吉図書館改修工事2015報告：1階新聞・雑誌コーナーと3階北閲覧室．MediaNet．2015，no.22，p.50-52.